

明治三十九年三月三日發行

十全會雜誌

第十四號

《非實品》

全澤醫學專門學校十全會

曆茲に改まりてより、慶雲天に翬き瑞氣地に滿つ、外は旭旗曙光に輝き、内は鼓腹泰平を謳ふ。

顧みれば、本誌が呱呱の聲を擧げて已に十有一年、生等此の任に當りて全ふするなく、菲才淺學、唯功なきを愧づ、實に慨嘆に堪へざるなり。

退いて既往は諫むべからず、進んで來者を追ふべきのみ。本誌のある、蓋し聊か將來の醫學界に貢獻する傍、天下を廓清せんを期するにあり。乞ふ、本會千餘の諸君、斯道の爲に、本誌の爲に、益す努力せられんを。

雜誌部長兼編輯部長 宮田篤郎

委員 松田菊治 宇野益之 野崎芳孝

全 笹岡芳名 (醫學科四年)

全 野村義雄 藤井一雄 (全三年)

全 池部正鑒 德久恒治 (全二年)

全 福村深教 坪田本照 (全一年)

全 高保二 (藥學科三年)

全 大澤誠一 (全二年)

全 酒井謙二郎 (全一年)

明治三十九年一月元旦

廣 告

謹賀新年

明治三十九年一月元旦

十全會長 高安右人

謹賀新年

在獨逸ストラスブルグ

明治三十九年正月元旦

佐々木達

謹賀新年

明治三十九年一月元旦

櫻井小平太
山碕幹

謹而賀新年

明治三十九年
正月元旦

在獨乙 飯森益太郎

謹而賀新年

明治三十九年
正月元旦

在紐育市 松原三郎

恭賀新年

明治三十九年正月元旦

米村吉太郎
川北辰吉

謹賀新正

明治三十九年
一月元旦

病理學教室

村上庄太
小原芳雄
近藤勇記

謹賀新正

解剖學教室

金子治郎
石川喜直

謹賀新正

私立七尾病院醫員

明治三十九年一月元旦

渡邊疆

謹賀新年

明治三十九年

一月一日

於北滿洲 第九師團第一野戰病院

野口詮太郎
高岡榮
東良平
近郷重孝
濱地藤太郎
新次郎

正賀

明治三十一年一月元旦

十全會

雜誌部委員	講話部委員	柔道部委員	劍道部委員	弓術部委員	遊戲部委員	茶話會委員	學術實習部委員
-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	---------

日本內科學會廣告

本會ハ來ル四月四日ヨリ開會ノ第二回日本聯合醫學會ト聯合シ東京帝國大學構内ニ於テ第三總會ヲ開ク舉行順序左ノ如シ

第一日、 日本聯合醫學會開會式及總會

第二日、 本會庶務會計報告、議事及宿題(萎縮腎)報告、演說

第三日、 宿題(肋膜炎)報告、演說

第四日、 日本聯合醫學總會及懇親會、參觀

本會ハ第二回日本聯合醫學會ノ規定ニ依リ一定ノ金額ヲ全會ニ支出シタルヲ以テ本會々員ハ會費ヲ要セズシテ日本聯合醫學會々員タル總テノ權利ヲ有ス

但シ本會々員ニシテ日本聯合醫學會々誌ヲ要セラル、諸君ハ金壹圓ヲ添ヘ三月廿五日迄ニ本會事務所ニ申込マルベシ

入會希望者ハ原籍及現住所ヲ記シ入會金參圓會費金參圓ヲ添ヘテ此際申込マレタシ

東京市神田區西今川町三番地

日本內科學會

漫 録

○螢雪餘光

笹岡釣雪

るの二

註・Busento、伊太利の河。

凡ての詩中最も句調の流暢なるものとして著名の作なり。

DAS GRAB IM BUSENTO.

(PLATEN.)

Nächtlich am Busento Ispohn bei Casenza dumpfe Lieder,
Aus den Wassern schallt es Antwort, und in Wiebeln
Klingt es wieder!

Und den Fluss hinauf, hinunter, ziehen die Schatten
taptrer Götter,

Die den Alacich beweinen, ihres Volkes besten Toten.

Allzufüh und fern der Heimat mussten hier sie ihn be-
graben.

Während noch die Jungendlocken seine Schulter blond
ungaben.

Und am Ufer des Bunto reiheten sie sich um die Wette,
Und die Strömung abzuleiten, sie ein frisches Bette.

In der wogenleeren Höhlung mülhten sie empor die Erde,
Senkten tief hinein den Leichnam, mit der Rüstung auf
dem Pferde.

Deckten dann mit Erde wieder ihn und seine stolze Habe,
Dass die hohen Stromgewächse wüchsen aus dem Helden-
grabe.

Abgelenkt zum zweitenmale, ward der Fluss herbeigezogen:
Mächtig in ihr altes Bette schäumten die Busementwogen.

Und es sang ein Chor von Männern: Schlaf in deinen
Heldenehren!

Keines Römern schnöde Habsucht soll die je das Grab
versehren!

Sängens, und die Lobgesänge tönten zort im Götterheere:
Wälze sie, Busentowelle, wälze sie von Meer zu Meere!

Windeln=洞卷

Schatten=陰

blond=光^ラ

reichten=並

um die Wette=競^ウ

abzuwarten=疏

Bette=河波

wogenleeren=澎湃^{ナル}流^レ

Höhlung=穴

wühlten=堀^ル

stolze=立派

Abgelent=元^ニ戻^シ

schäumen=泡立^ッ

Chor=ム^レ

schüde=賤^シキ

Habsucht=慾心

versehren=汚^ガス

Wälze sie=轉^ベヨ

sie=歌^ヲサス

附記、西歐詩集を註釋するは専門大家の猶頗る苦む所

不肖敢て斗肖箭箭の才を以て金篇玉章を壊く、蓋し慚愧

に絶多ざるものあり、則ち茲に此稿を擱き後の大家に竣

つ、觀者夫れ之を諒とせよ。



○金葩玉蕊

釣雪小史

歌まくら机上に堆き草花のいろ／＼ふり積む雪をよそに
各芳ばしき香を吐く夕げに芽出度き限りなれ、今そこは
かどなくこゝに拾ひ萃めしほどはあなじ香慕ふ小さき野

邊の蕈が精なり、見ん人愛らしの蕈をゆめ笑ひな玉ひそ、
明治丙午の年一月念日城東品川町の鳩居にてしるす。

恩師鵜軒博士すぎつる夏の頃避暑されて鎌倉におはし
き、われも遊びし由井ヶ濱もろゝる偲ばしき繪葉書に
かいつけて左の詩を贈られぬ。

懷古

欲把興亡問水濱 平沙七里淨無塵 白旗山下千年土

瘞盡英雄與美人

一 餐

土肥 民卿慶

阪本令尹とれなじき年七月三十日、福井五嶽樓上に
會し詩一首を忝うす

登樓此夕好坡襟 荷氣一簾涼影侵 交態只宜杯裏見

月前酒味故人深

蘋園主人

精神一到事皆成 無水之間舟可行 二十餘年疏鑿業

盡從烈氏寸心生

乙巳八月錄

過蘇士運河之舊作

碩果生文

碩果生は人も知る南條文學博士の號なり。

乱嶂横江紫翠浮

前林缺處聳危樓

夕陽人散棋聲絶

水自淙々山自幽

題 書

松 南 生

松南生は石渡秀實先生の號なり、書に巧みなること
沿く世人の知る所なり

身繫宿生業病糸

離奇略似劉廷芝

金棺夜哭鬼吹火

淚滴々燃無盡時

哭 寧 齋

鷗村小漁

年こゝに降る雪さむき加賀の旅、わが夢またもふる里
にあり

美 水 郎

降りて積みて止みし二尺の雪月夜、神の御園のかくあ
るらしも

全

長き袖に燭を掩はへの花吹雪、春のほがいの夜の興酣

けぬ

た つ み

『平和の海にさらば』とさへやきて、春野の水は艸にわ

かれぬ

全

古き藝術、さびしき春の奈良の旅、この子が歌は若艸
に泣く

全

ほこらじの春野の空の揚雲雀、あゝ人の子は市になや
める

全

いたづらの戀の泉を神も惜め、高き香春は艸に流るゝ

全

たつみは海軍々醫佐々木學兄の實名なり、曾て白月
主幹の『黒百合』に稿を乞はれし時君に囑して之を興
ふ、今そが中より覺ゆる歌五首をこゝに掲げぬ。

夕なりいなづますなる雨雲の風にゆらるゝ芙蓉の花や

青 楓

いつぞや蕪村忌に敬中、南涯、天聲三氏蕪
のまぜがきをなし之に讃を乞ひけるに

ろりたての頭くらべる火鉢かな

紫 影

汁鍋にあられ飛び込むこの日哉

洗 耳

今日一日儚にたつかぶらかな

漁 村

さゝ鳴や薄氷すくふ手 水鉢 巽

辛卯の夏芳名君に句を乞はれて

けし散るやさとしるがへる 普門品 全

鳴見ねつかくれつ澤の眞菰かな 白月

提灯のとぼくと蟲の嵯峨野哉 全

君と別るゝにあはず夢に入るこ

としきりなりければ

薄雪の霽にまぎれて君や來し 鷗 邨

初日まつ渚ありきや庵の前 芹 村

紅梅や藁焚く家と思はれす 雨 城

○坑内の闇 雨 橋

(足尾めぐりの一節)

小瀧^{こたぎ}警局で案内夫と、提灯と桐油紙^{かつぱ}とを借りて、坑口

へ急いだ。

案内者が無ければ到底獨りで通行は出來ない、光明界と異^{ちが}つて暗黒世界であるから、闇夜に物を探るに手

許にあつてさへ分らぬ如く、とんと方向の感覺^{かんかく}を失つて仕舞ふ、それが一間や一町ならばまだしも、一里半に垂んとする坑内では、初め僅かの過誤^{あやまり}が結局意想外の失敗を招く、のみならず三河の八つ橋のやうに、水行く川の蜘蛛^{くも}手なればで、八筋位の路なれば何の事はないが、明治三十四年の調査でさへ、本口坑^{ほんぐち}の主要探鑛場十七ヶ所、有木坑が十六箇所、大通洞三十箇所、小瀧坑三十二、合せて九十五箇所の探鑛場があつて、各道殆んど同じ幅員と高さをもつて居る、ろして今日では事業が進捗して各二枝に岐れたとすれば、實に百九十の墜道が相通づることゝなつて、非常に完全な迷路である。

其の上それらの探鑛場は全一平面にあるのではない、横坑道もあれば縦坑道もある、本山鑛業事務所を地平にあると見做して、第一が高きこと二百九十八尺、第二が二百八十尺低面にあり、第三が更に降ること二百六十三尺である、斯く高低の變化に富むで居る爲、階段また階段と自分では蒼穹^{あはそら}に登る梯子では無いかと疑はれるのや、

鵜越への逆落し此の儘奈落に通づるには非ずやと思はる

鉛直な梯子を昇降せなければならぬ、おまけに電車の軌道は日比野のやうに錯雜して居る、これが如何して一人で行かれやう、案内者は吾が命である運命の支配者である、商賣は道によつて賢し智識や財寶がかゝる場合に何になる！。

提灯は僕の携へ入るべきもので、坑夫は例のカンテラを吊して行く、提灯には小瀧醫局と記してあつて上に今の記號が朱書してある、抗夫などの中よりは随分野蠻人があつて、坑内では偶々慘劇をやるとの事であるが、醫者と坊主はアイスや執達吏のやうな役でないから、安心の出来る看板といふものだ。

桐油紙は僕のやうな三ッ揃三圓某の洋服を一割價切つたのでは別に必要もないけれど、雨降り後はどうしても水が漏れ易く、殊に御承知の丹礬水であるのでは是非持つて行けとの注意があつた、で僕もうつかり襠げでもした日には大禮服を臺なしにするからと、慾張つてなるべく

大きなのを借りた。

さあ、これから一步一步と地獄の門に近づきつゝあるのだ、ところ／＼に岩が道に突き出て一里塚とも思はれる、灯を点じて歸り行く坑夫の、顔色いたく青白さが、煤で黒いのを見るたびに亡者かと物凄しい。

坑口前の釣橋―僕は三途の川かと思つた―を渡る頃から、交代の堀子がカンテラを持つてずらりとならむで居る、穢れ腐つた絆纏は泥で養染めたやうに、蓬髪垢顔、額に刀痕のある者や、目玉のざろりとした者や、恰度羅刹の五百羅漢である。

橋を越すと左側に事務所があつて監視が一人と、帳簿書棚の奥には五六の頭顱が見えて居つた。

僕は携へた蝙蝠傘を案内者に托した、渠はマツチを擦つてカンテラと提灯に点ずる間に、僕は桐油紙を羽織つて「さあ参りませう」といふ言葉の下、午後二時半の日盛りを、三尺と歩まぬうち、既に明暗境を隔て、頗る前途を懸念せしめた。

初め僕はたとへ坑内にしろ、漸々光線の量を減じて行くであらうから、眼の反應も習慣的に加減せられろんないに不自由を感じぬであらうと、然るに實際は全く異つて、最う忽焉を眞の暗である、前後左右、俯仰して何物をも認むることが出来ない、冷かなそして一種現世的ならざる風は、たねず頬を掠め、桐油紙を翻しカンテラの焰を流して、眞に何處より來つて何所に行くを知らずである。

僕は先導の火をたよりに、提灯の照らさるゝ、平方一尺ばかりを見つめながら、枕木を傳ふて進むのであるが、先導は慣れたもので、大股でのつしゝと歩くくし、此方は心配で以て脚が出兼ねるのだ、こんな暗憚たる地下道で、もし運命の神様が棄てゝ行かれたらばさて何とせうぞ、瀛車のやうに大勢乗り合つてだに墜道は心細さを、堅固ならぬ發掘の坑路、あの恐ろしいダイナマイトの響、鑿岩の音が今にも山の崩れるやうに、排水の流れ冥路の露とつめたく、山神のみあれありせば此の身さながら闇

から闇。その頼りなさ心細さよ。

「オイ君餘り早過ぎる今日は八里の山越で疲れて居るから今少し悠然して呉れ」と弱い音を吐いてついでゆく、まかし一二町もゆくとまた遅れる「君一寸一寸僕は鑛脈の有様を見るのだからろんなに急いては見られない」などゝごまかしつゝ。

其の時、遙かで暴風の吹くやうな音がすると思ふまに、次第々々に轟々の響を加へ、遂には四壁におびたいしい震動を感じて、僕をとり巻く空氣が、共鳴し吼吠し、反響し、衝突して、耳も聾ひ氣も遠くなる許り、すはや二十餘年の玉の緒の絶ゆるは今々と觀念しつゝ、絶叫したのである。

イヤ絶叫せんとして、渠のこよなく落ちつき拂つて燈火の消ぬかゝるにも足を留めず、枕木の上また上と、殆ど器械的の整調をつゞけつゝある渠れのうしろ姿に服して、恐れを寧ろあきれに變ぜしめた、が堪えずして云つた。

「君大變な音がするが一体何だい？」

「電車が本山へ出てゆくのですよ」

「此の道を行くのだらう、僕等の歩るいどる？」

「左様です」と云つて省みもしない

「氣味が惡るいな！」

「此處を歩るいどれば大丈夫です」

僕はひろかに振り返つた、驚くも既に遅い哉、電車は間近く二のカンテラを巨蛇の両眼ときらめかし、車の上下には激しい放電の青い光が、鬼の牙のやうな岩角を照して、明るい所は眞青に、暗さは烏玉の色もない、暗も光の戦ひか、凄絶なりけるもの有様。

先導はふと立ち留つた、續いて僕も立ち留つた。

電車は二分とたゝぬうち速力を早め、例の大震動をもつて二人の影を鮮かに岩壁に映して、傲然相關せざるものゝ如く過ぎ去つた、鑛石や土砂を満載せる貨車の、吾が手に觸るゝまで近き所を。

二人はまた歩み出す。

「且那一寸頭を下げてください」

「よし／＼別に下げなくとも自然にさがつくる」

「最うよろしう御座います」

少し行くと

「また頭をさげて……」

「よくあるな坑内の天井を修繕すのだね」

「いへ、留木を入れ代へますので、それには電線を下げぬと仕事が出来ませぬから、あれに觸つちやたまりませぬ」

話しながら無意識に、粘土に這り、軌道に爪を痛めて行く。

突然帽を打つ者あり、水の落ちたのである、とーん、びやーんと餘韻をひいて響くものあり、石片の落ちたのである、草鞋の音、水のせゝらぎも僕はかく單純に聞いたことが無い、髪かみのふるゝをも塵ちりの相衝あうしやうつをも、物としてきかれぬことはあるまい。

この森閑しんかんとして暗冷あんれいなる地中の路、たゞ黙々もくもくとして人

を葬^{はふ}り去るやうな地底の墜道に、見へぬ手で五体を壓迫せらるゝ如く感じた時、尤も嬉しく思はるゝは前方に燈火を認めた瞬間である、一つまた一つ宵星^{よひほし}のやうすなり

と顯^{あらわ}はれて此方をさして進んでくる、山ふところに行き暮れつ、宿を求むる旅僧^{たびそう}の、紅葉^{もみぢ}ふみわけ鳴く螢、火影^{はかげ}はしかと見へぬながらも、無明^{むめい}の暗を照す佛の光と尊くて、如何^{いか}に力づくことだらう、人を慰むるものは自然に非ず

して矢張り人間である、天空幾万里外、火星にさへ人間の住んで居ると、疑ふより冀^{ねが}ふものは人間である、果てしもあらぬ青海原^{あさみづはら}に、幾夜^{いく}か楫枕^{かぢまくら}なみ枕、浮き寝^{うね}わびしき時、水天男^{すいてんぼう}鬚^{ひげ}の彼方に船體を見たとし給まへ、吾が船はどんなに友の來たのを喜ぶだらうか、若しも船が互に近づいた時、むかうの船に一人も乗つて居らなかつた破船であつたならば、如何に吾々は失望するだらう、「蟹^{かに}は蟹としならび住み」と云ふ詩の句があるが、蛙は蛙を得て喜ぶのだ、蛇を得て決して喜ぶまい、「人は人としならび住み」だ、あゝ人間人間と、何でも千古の疑問を解決

した様な氣で、相變らずくゝらゝゝ路を辿^{たど}つて居ると、人界の信號と頼母^{たのも}しかつた燈火も、一つ消へまた一つ消へて以前の暗黒となる。

「最^{よほど}う餘程^{よほど}きたゝらうな」

「へ……まだ三分の一しか來ませぬ、且那、あすこに明るく見へませうあれは坑内^{こうない}見張所^{みはりしよ}です、そこから少し行くと丁度半分といふところですよ、へい」

見張所とは監督所で普通の家と異^{かた}りはない、皆硝子窓で年中電燈がついて居る、午前の五時だが午後の五時だか一向分らず、夏も冬も同じ様だと云ふ。

少し行くと成る程三叉路^{さんさろ}の會合点があつて、僕等は左をとつた、こゝからは電車の往來頻繁で、横合から不意と出る、前からは空車を引つ張つてくる、後からは滿載して行く、電線に頭をさげる、粘土で迂る、桐油紙をはね飛される、小心翼々もので進行遅々たる次第。

けれど牛のあゆみのよし遅くともタイムにディスタンスは得らるべき道理、しばらく無言で排水よく通風^{つうふう}よき平

道―あとで聞けばこれが銀座通りと云ふのだ想な―を歩むで居ると、目のあやまりか、青い火の一團が見へる、や、これはアーク燈だな、いやアセチレン瓦斯と洒落て居るな、と内心大喜びで足どりも早くなる、頸は三尺も延して蜘蛛の巢のやうな電線、往來する電氣列車、織る如き人影に驚きつゝ、自分は既に坑口を免れ、暗黒界を離れたのを、少しも知らぬのであつた。

更に驚く可し、そは燈火の光にあらずして、大空より太陽のそれであつた、廣濶なる坑内とみたのは燦爛たる人間世界であつた、そのときの喜びは甦つたやう、あまりの事に茫然として、眼の前に建ちつく工場や、立ち續く煙突や、無數の勞働者や、巍然たる西洋館や、たゞ最う數世紀を隔て、相見る浦島が子の如く、眩ゆいやうな眞晝の光に、尙ほ提灯を点けたまゝ、瞬もせず口をあんぐりと開いて居た。

(完)

○破蓮

林 琴 柱

幸あれや妻こひ夫こふ子等の上に雨もふらすな風もふかすな(友の新婦に)
わが庵は卯の花月夜ほととぎす酒屋へ一里おもしろの里
公達が狩のかへりの染手綱菊のつゝみに月すいでたる
右へゆかば紅葉か岡ふ左は菊の名所いく迷ひしつ
行ずりの袂とらへて路とへば梅さく宮を右へ行けとぞ
新妻の薄茶手前に歌がたりともに興する春の雨かな
深傘にうしろゆかしの人のふり都の雪に袖の行ずり

* * * * *

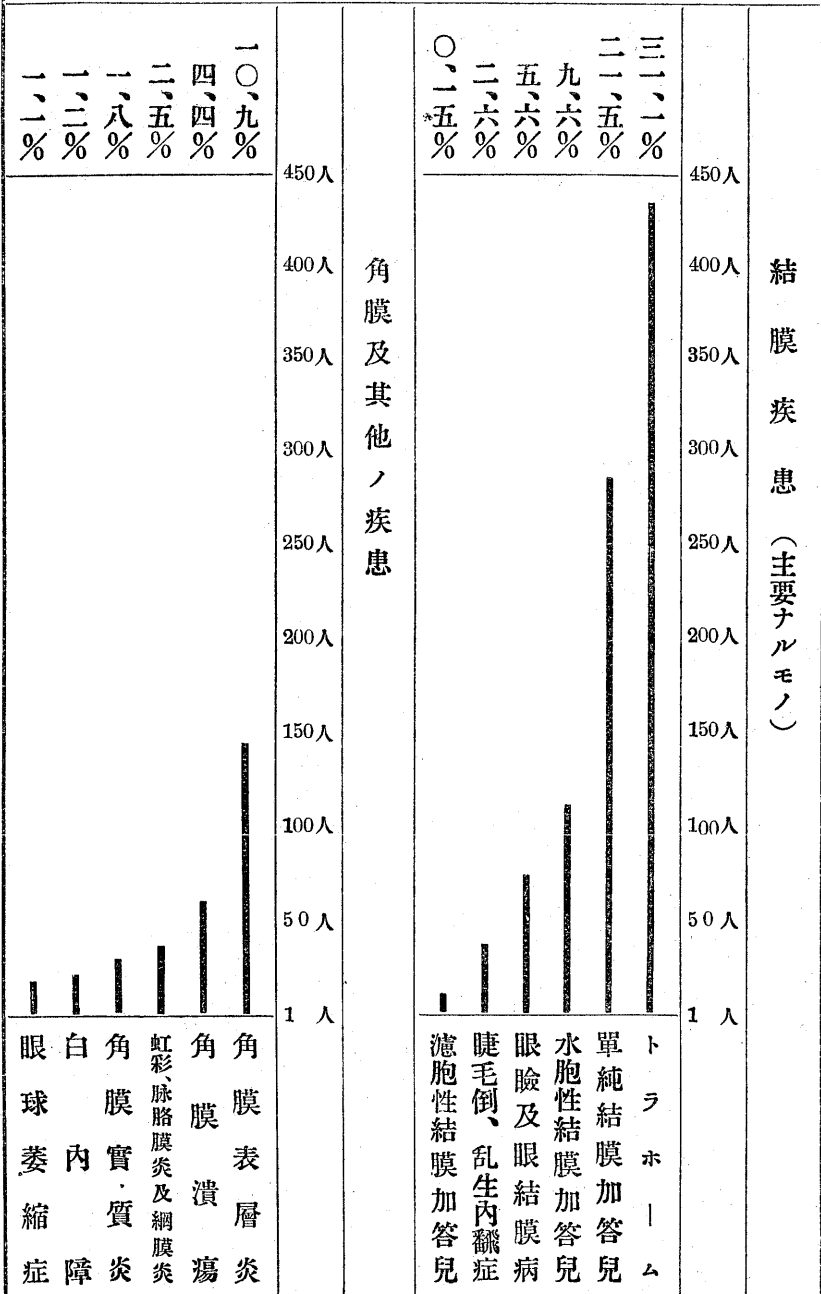
雜誌 報

○眼科の統計

私立七尾病院 T W

われ能登に來りてより眼科のことにはあまり立ちさわらざれども林主任醫がものせる昨一年間の統計を見たるまゝに乞ふて本法の餘白をからんとす讀者よ余はあまり贅語を用ゐず無言の表が無言の言をなすを睹られよ

第一表 主要なる眼疾と罹病數

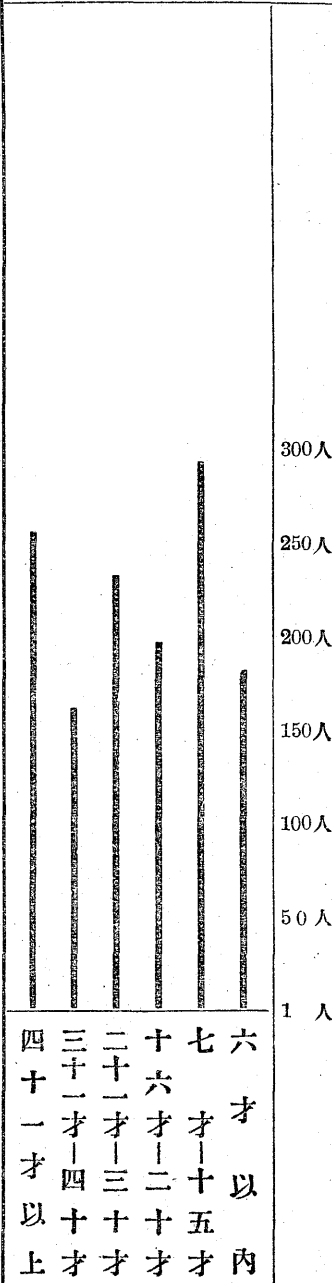


其他略ス

備考、總數千三百十五人

トラホームニシテパンス(角膜表層炎)ヲ兼ヌルモノハ兩欄ニ編入シタリ、

第二表 年齢ト罹病數



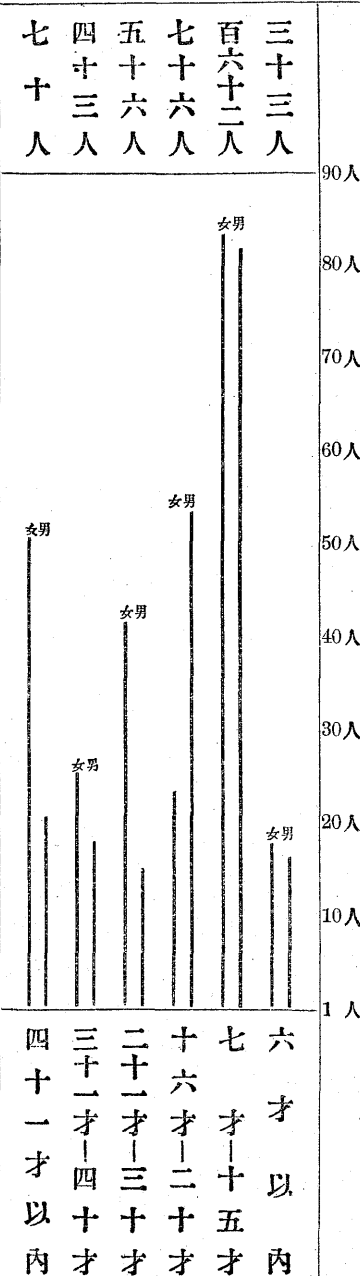
備考

男性全數
女性全數

六百七十三人
六百四十二人

合計千三百十五人

第三表 性及罹病者ト年齢男女



備考

男性全數
女性全數

二百〇八人
二百三十二人

合計四百四十人

○若越醫學會金澤部會設立

若越兩國醫藥業者より成立せる全會は會長男爵橋本綱常先生の統率により當地にもろの部會設立の計劃ありしが去十五日殿町樓に於て盛大なる發會式を舉行し集るもの軍醫、藥劑官、開業醫、病院醫員、學生等にして五十餘名なりき、猶當日は橋本男爵、土肥博士、木下博士(正中)その他有名なる九大家より祝電あり、幹事選舉の結果林篤、笹岡芳名、丹羽直、長村吉太、石川壽人氏等當選就任せりといふ、諸ふらくは維新の大豪杉田玄伯、奥村良筑、橋本左内等をして地下に瞑せしめよ併せて後來健全なる發達を望む。

○うたかたの記

人世離別ほど悲しきはなし、しかも我級全窓或は本校を去り或は來り或は死する者一再ならず即ち死者は舊臘に於ける丹羽佐忠君ありしが今又年の新まると共に月の廿二日島田義一君の逝去を聴く、まことに悲慘の極みなり。

病者にては高峯亭一郎君去る、その他吉野要、山中房次郎、岡忠治三君の如き亦本校を退く、逝くものは詮なし他の諸君幸ひに人世の行路を誤らず向上の理性を固くし共に俱に進まれんことを希ふ。而して豫備陸軍中尉七五三龜吉君戰役を終へ、秦親眞、酒井利勝両君は病癒にて各本級に歸られ伊藤二郎君は遠く千葉の醫專校より轉じ來る願ふらくば体育を獎勵し本校の課程を終へ以て國家の望みに添ひ万分の報恩を尽されんことを、敢て記す

* * * * * (雪生)

會報

○叙任及辭令

十一月二十日

雇申付

月俸金拾八圓給與

青木他吉郎

一月十五日

講師 市村 塘

擔任教官應召解除歸校ニ付囑託ヲ解ク

依願囑託ヲ解ク

講師 鷲田 發次郎

(以上本校)

十二月二十二日

金澤醫學專門學校教授正六位醫學博士

金子 治郎

叙勳六等授瑞寶章

金澤醫學專門學校助教授勳八等

福見 常太郎

叙勳七等授瑞寶章

(以上賞勳局)

十二月二十八日

金澤醫學專門學校教授正六位

下 平 用 彩

陞叙高等官二等

金澤醫學專門學校教授從七位

湯 目 隆 績

陞叙高等官六等

(以上内閣)

○會員動靜

昨三十八年九月卒業せられたる得業士諸士の卒業後の動靜は左の如し

岩砂 鈴次郎氏 金澤病院内科に勤務(松浦内科)

齊藤 傳平氏

鳴脚 光榮氏

島村 伊之助氏

金澤病院内科に勤務(山碕内科)

草野 佐一郎氏

金澤病院外科に勤務(宮田外科)

中西 鳥吉氏

金澤病院外科に勤務(下平外科)

須貝 璋太郎氏

声澤 孝治氏

吉池 省吾氏

金澤病院眼科に勤務

熊西 中藏氏

奈良 八郎氏

金澤病院婦人科に勤務

鷲山 謙吉氏

岡田 虎介氏

近森 村主氏

笹田 順二氏

東京駿河臺井上眼科に勤務

渡邊 彊氏

中村 德藏氏

近藤 勇記氏

大阪府檢疫醫奉職

田村 圓四郎氏

久保田 保次氏

有壁 一雄氏

大聖寺町江沼病院に奉職

牛塚 榮太郎氏

城 起吾老氏

京都醫科大學婦人科に勤務
小立野上石引町に於て開業
相州佐々木杏雲堂平塚分院に奉職

河野益躬氏	兵庫縣立神戸病院眼科部に奉職
小椋正香氏	金澤監獄醫勤務
安積日新氏	兵庫縣立神戸病院婦人科に奉職
岡村俊照氏	自宅開業
三崎吉太郎氏	岐阜縣岐阜病院に奉職
金平鐵太郎氏	能美郡小松町勝木病院に奉職
並河龜六氏	東京豐多摩郡淀橋町大字柏木に開業
高橋重二氏	東京三浦内科に勤務
杉田治十郎氏	敦賀郡立病院に奉職
成澤輝一氏	
尾崎平吉氏	東京芝區河村病院に奉職
中川喜平氏	京都醫科大學外科に勤務
長澤安弘氏	東京醫科大學耳鼻咽喉科介補勤務
谷中黎次郎氏	自宅開業
彦坂誠一氏	自宅開業
松尾等氏	兵庫縣神戸市私立大國病院に奉職
庄司正義氏	東京上野廣小路多田醫院に奉職
江守武氏	東京淺草區樂山堂に奉職
淺川義治氏	兵庫縣神戸病院外科部に奉職
高橋幸七郎氏	東京醫科大學外科介補勤務
岩崎勝治氏	福井縣武生病院に奉職
小泉永宜氏	富山縣立病院に奉職

森舜司氏	京都醫科大學に奉職
須藤庄太郎氏	大坂難波病院に奉職
平原雲新氏	自宅開業
池田菱吉氏	本校解剖學研究
田邊傳六氏	京都醫科大學眼科に勤務
中須熊藏氏	大坂難波病院に奉職
谷澤一郎氏	
佐々木純一郎氏	見習醫官として歩兵第七聯隊へ入隊の 處一月二十四日附を以て三等軍醫に任 せられたり
鈴木實氏	
羽田公太郎氏	
山下銀吾氏	
水上俊三氏	
吉田東秀氏	見習醫官として赤坂三聯隊へ入隊せら れたり
山田伊之助氏	
小町環氏	
英軒二氏	
松井源長氏	見習醫官として歩兵第七聯隊へ入隊せ られたり
長谷美氏	
伏田金三氏	
窪美一久氏	
福岡捨雄氏	一年志願兵として歩兵第七聯隊へ入隊 せられたり
千田常外氏	
杉本恒治氏	
黒田眞岳氏	一年志願兵として歩兵第三十五聯隊へ 入隊せられたり
森清吉氏	
長井運男氏	海軍少軍醫候補生を命せられ海軍軍醫

坂本信一氏 學校へ入學せられたり
一年志願兵として近衛第一聯隊へ入隊
せられたり

來間隆二氏 不明

森澤重春氏 不明

佐野爲明氏 不明

井上啓治氏 不明

岡田甚美氏 不明

成田來治氏 不明

折口 靜氏 不明

福岡可鋪氏 不明

上田 茂氏 不明

安田三木氏 新潟市竹山病院に奉職

津田作平氏 不明

藤村敬一氏 不明

高橋八郎氏 不明

森 公平氏 不明

一宮重之助氏 不明

甘利 昇氏 不明

山本重親氏 不明

村尾純昌氏 佐世保市富田病院に奉職

四倉重篤氏 不明

江村 正也氏 不明

(以上醫學科)

西澤 寛次氏

曾根 章氏 不明

川勝 寛三氏 自宅開業

八木徳太郎氏 自宅開業

海津 四郎氏 一年志願兵

溝口 龍三氏 福岡醫科大學藥物學教室に勤務

稻崎 龍助氏 一年志願兵

貴島善兵衛氏 一年志願兵として歩兵第八聯隊第六中
隊へ入隊せられたり

毛利 德基氏 不明

湯淺 啓一氏 一年志願兵

福田 靜氏 大聖寺町江沼病院に奉職

村澤 金廣氏 自宅開業

辻 實治氏

藤坂友次郎氏 富山縣技手奉職

金堂 圓氏 不明

金谷 季男氏 不明

(以上藥學科)

○伊藤禮二氏 三十七八年戰役の際第三師團野戰電信隊
部附として出征の處目下凱旋途中

○寶島惣太郎氏 後備役一等軍醫の處三十七八年戰役の際第三師團第六聯隊附として出征三十八年十二月十一日召集解除目下三重縣一志郡中原村大字須賀五四七番地に於て開業

○通常會員 七五三龜吉氏は豫備役、山崎内藏三氏は後備役として應召中の處各々舊職召集解除本春學期始より復校せられたり

○島誠郁氏 戰役中敦賀分院に勤務の處一月中旬召集解除の上歸宅せられたり氏は本月下旬内科學研究として東京醫科大學へ東上の由

○橋本監次郎氏 一等軍醫たる氏は舊冬滿州軍總司令部と共に凱旋の處東京豫備病院附兼陸軍省醫務局御用掛兼務を拜命せられたり何れ殘務整理次第陸軍省に勤務の由
○河崎有作氏 豫備三等軍醫たる氏は一昨年來應召從軍中の處舊職十八日凱旋歸郷從來の通石川縣羽咋郡高濱町に於て開業せらる

○松王數王氏 名古屋赤十字救護班に勤務せられたる氏は舊職解散に就き歸坂せられ目下大坂南區鰻谷東の町二番邸高橋醫院に勤務せらる

○敷波重治郎氏 仙臺醫學專門學校に教鞭を執らるゝ氏は今般文部省より獨國へ滿二ヶ年間留學を命せられ來る二月十七日橫濱出帆の獨乙船チーテン號にて出發の由

○陸軍々醫並に藥劑官の動靜

二等藥劑官たる山岸理一郎氏は靜岡衛戍病院附に、三等軍醫正たる野口詮太郎氏は歩兵第三十六聯隊附兼鯖江衛戍病院院長に、三等軍醫江藤潤一氏は歩兵第七聯隊附に、一等軍醫高岡榮氏は歩兵第七聯隊附に、三等軍醫佐野愛二氏は歩兵第三十五聯隊附に、二等軍醫清水秀夫氏は歩兵第十九聯隊附に、一等軍醫熊谷兵次郎三等軍醫石橋四郎全小原德太郎氏は歩兵第十九聯隊附に三等軍醫永井學造氏は歩兵第三十六聯隊附に、三等軍醫朝倉重敏氏は野戰砲兵第九聯隊附に、一等藥劑官高畠初四郎氏は金澤衛戍病院附に、一等軍醫本多勝久氏は敦賀衛戍病院附に、三等軍醫阿部時雄氏は歩兵第三十聯隊附に、二等軍醫溝口美代志は仙臺衛戍病院附に、三等藥劑官上田英雄氏は大坂衛戍病院附に、三等軍醫根守政規氏は善通寺衛戍病院附に、二等軍醫増田貞吉氏は第九師團軍醫部部員に、二等軍醫駒井定哉全藤波謙氏は臺南衛戍病院附に、各々補せられたり

○海軍中軍醫堀井吉平氏は橫須賀海軍病院附に補せられたり
○野口詮太郎氏高岡榮氏東良平氏近郷重孝氏濱地藤太郎氏新次郎氏は第九師團第一野戰病院附として一昨年來出征の處一月中旬無事凱旋せられたり

○新年拜賀式 千代田の宮の松翠ます／＼深く、四海波
穩かに、和氣霽々たる雲居には、瑞龍かけりて、新たな
明治三十九年は來りぬ、抑も開春の第一日、吾れは齋
戒沐浴して、上は聖壽の萬歳を祝し、下は同胞の平和を
賀す。我が校例によりて拜賀の典を濟々堂に擧ぐ、午前
九時三十分、職員生徒一同臨場するや、先づ校長御眞影
の前に進み、謹んで賀辭を奏せらる、此間一同最敬禮を
なす、次に校長より懇切なる訓示あり、午前十時十分、
式全く終る

○十全會第三十五回講話部

通常會

昨年十一月廿五日といふに舊病院内科教室に開かれぬ規
定の時間を三十分も延はしても空席の多きに内々額を集
めての心配も満堂の賑に反りて腰掛の足らざるに腹を痛
むに變じぬ先づ上田部長登壇開會の辭を述べられ次で順
次左の講話ありたり

第一席 小兒病一般診法に就て 柴田順三君 本題に
就て醫師の注意すべき点を擧げられ遺憾なし

第二席 子宮纖維性筋腫を有せる患者及び子宮より摘
出せる胎兒化骨せる各骨片の供覽 小川教授に代りての
未會有の供覽に稀有の見物かなと感ぜざるはなかりき

第三席 小さき泉 酒井謙次郎君 沈痛なる口調にて
杖とも頼み力ともなりし亡友を偲び共に語らひし「清き
泉の如き生活」を末の末迄理想とせむかなと述べらる聞
くものゝ如何に心の緒琴にや觸れたりけむかし

第四席 可なり大なる子宮粘膜炎下纖維腫を腔郷より摘
出せる實例 岡田剛吉君 腹膜下筋纖維腫、子宮纖維腫
及び子宮有莖癌腫の三實例につき君が所感をも述べて報
告し給ひぬ

第五席 樹枝狀角膜炎の一例 村山常三郎君 休暇中
に得たる一例を述べ次で高安教授に質問の矢を試みらる
第六席 骨膿瘍の三例 山本長助君 親しく手を下し
給へる三實例につき述べられたり

第七席 村山君の疑惑に就て 高安教授 整々疑惑の
起りし理より述べられ延いて高説を聞き曩に村山君の間
と共に迷へる聽者をして一々首肯せしめ給へき

第八席 ハイカラ亡國論 長井敬孝君 其の風采に於
て其の態度に於て如何にも蠻襟らしき君が口角泡を飛ば
しての罵詈に耻ぢて竊に襟を低うせし人も三又四

第九席 診斷と療法 龍田恭齊君 本題につき委しく
說かれて些の遺憾なし

第十席 人生觀 酒井碩二君 論じ來り論じ去る處君
が得意の人生觀益々君が見界の發展せるを覺つ

第十一席 負傷兵より摘出せる銃創 宮田教授 眞打
として登壇し給へる教授の講話前會より次ぎて益々興に
入り末梢神經の銃創より始め一般療法に至る何れ本誌に
も出づべきかと思ふて故意に畧しつ
かくて十時も過ぎろゝる冷氣の身にしみ渡るを覺てけ
れば上田部長閉會の辭を述べられ茲に本年の講話會も終
りたり (峨洋生)

* * * * *

會 告

○寄贈及交換書目

(一月三十一日迄領取之分)

臨牀藥石新報 六七八	藥石新報社
藥石新報 五三、四五六七八九〇、	全
莊內醫學會々報 三七八	全
東京醫學會雜誌 一九、二二三、四、五、六、七、八、九、一〇、一一、一二、	全
產科婦人科學雜誌 七、二、	全
醫學中央雜誌 三、四、五、	全

助産之榮 二四五六	緒方助産婦學會
國家醫學會雜誌 三三四五	全
藝備醫學 二四五六	藝備醫學會
神經學雜誌 四八、九、一〇、	日本神經學會
研瑤會雜誌 六七、八、九、	長崎醫學專門學校
醫海時報 五九、七、八、九、一〇、一一、一二、一三、一四、一五、	全
日本醫事週報 五九、六〇、一一、一二、一三、一四、一五、一六、	全
中外醫事新報 六二、六三、六四、六五、	全
東京醫事新誌 一四、一五、一六、一七、一八、一九、二〇、二一、二二、二三、二四、二五、	全
校友會雜誌 三四、五、	千葉醫學專門學校
藥學雜誌 二五、二六、二七、	日本藥學會
北辰會雜誌 四、	第四高等學校
東北醫學會々報	仙臺醫學專門學校
大日本私立衛生會雜誌 二七、二八、	全
醫事新聞 六九、七〇、七一、	全
鎮西醫報 九四、五、	全
公衆醫事 八、九、	全
校友會雜誌 三九、	京都府立醫學專門學校
日本助産婦新報 九四、五、	全
廣島衛生醫事月報 八四、五、	全
校友會雜誌 三九、	東京開成中學校
躬行會叢誌 二四、	全

緒方助産婦學會	全
藝備醫學會	全
日本神經學會	全
長崎醫學專門學校	全
千葉醫學專門學校	全
日本藥學會	全
第四高等學校	全
仙臺醫學專門學校	全
大日本私立衛生會	全
醫事新聞	全
鎮西醫報	全
公衆醫事	全
校友會雜誌	全
日本助産婦新報	全
廣島衛生醫事月報	全
校友會雜誌	全
躬行會叢誌	全

- 順天堂醫事研究會雜誌 三九五、六
 學友會雜誌 一六、
 衛生談話 五、一〇、六、一、
 成醫會月報 二八、五、六、
 日本消化機病學會雜誌 四、三、
 同窓會雜誌 一六、
 校友會雜誌 七、
 岡山縣醫學會雜誌 一九〇、一、
 治療新報 四、六、
 臺灣醫學會雜誌 三八、九、
 軍醫學會雜誌 一四、
 日本眼科學會雜誌 九、一二、一、
 校友會雜誌 七、
 產科婦雜誌 七、三、三、
 衛生新報 二六、三〇、
 治療藥報 五、六、
 中央婦人科學雜誌 三、三、
 皮膚科及泌尿器科雜誌 五、四、五、六、
 北越醫學會々報 一〇、
 好生館醫事研究會雜誌 二、三、五、六、
 大日本耳鼻咽喉科會々報 二、四、五、六、
 校友會々誌 四、

- 全 石川縣師範學校
 全 通俗衛生茶話會
 全 愛知縣醫學專門學校
 全 岡山醫學專門學校
 全 陸軍軍醫學會
 全 山口縣立德山中學校
 全 日本產科婦協會
 全 衛生新報社
 全 緒方婦人科學會
 全 日本皮膚科學會
 全 會
 全 會
 全 會
 全 會
 全 石川縣立第二中學校

若越醫談 三

新纂外科總論 前編上卷 外傷及炎症總論 一冊

腱狀緣及腱弓ノ人工形成 一冊

ゲンポウール解剖書 卷一、二冊

ヘルツ內科書 卷一、二冊

解剖學名彙 全一冊

近世診斷學 一冊

應用顯微鏡及化學的檢査法 完一冊

近世診斷學 一冊

○十全會々費領收

(明治三十九年
一月三十日迄)

- 金參圓 (自三十八年度五ヶ年分) 原田正廣君
 金壹圓 (至四十二年度) 星野正齋君
 金壹圓 (三十六年度一ヶ年分) 德木千秋君
 金壹圓 (三十八年度一ヶ年分) 山田義忠君
 金六圓 (自三十五年度八ヶ年分) 藤井助雄君
 金參圓 (自三十五年度三ヶ年分)

- 若越醫學會
 下平用彩君
 金子治郎君
 金子博士祝賀會ヨリ
 紀念トシテ
 三十八年卒業紀念ト
 シテ卒業生一同ヨリ
 鈴木文太郎君
 河野通夫在校紀念ト
 シテ醫科第三年級有志ヨリ
 全 上
 三十八年卒業紀念ト
 シテ卒業生一同ヨリ

○特別會員諸氏ヨリ年賀状ヲ受ケタル其住

所氏名左ノ通り

明治三十九年一月

十全會

特別會員	在旅順口	池田耕君
全	廣島市田中町二三、	井上只次君
全	佐世保海兵團	伊藤顯徳君
全	東京麹町區平河町三丁目金生館方	橋本監次郎君
全	留守第七師團輜重兵第七大隊補充隊附	稻坂清八君
全	常陸下妻	飯塚忠男君
全	羽咋郡富來村	石田五佐君
全	東京市牛込區市ヶ谷田町二丁目三、	敷波重治郎君
全	大坂南區鰻谷東ノ町二、	松王數男君
全	石川縣鹿島郡高階村	野村亮吉君
全	石川縣羽咋郡高濱町	河崎有作君
全	福井縣丹生郡立待村上石田	大橋豐君
全	步兵第七聯隊補充大隊	水上俊三君
全	福井縣鯖江町鯖江診療院	輕部修一君
全	宇都宮市江野町一〇、	吉住保君
全	富山縣射水郡下村	熊西中藏君
全	步兵第七聯隊補充大隊	山下銀吾君

特別會員	石川縣七尾第一病院	青木正枝君
全	東京本郷區湯島順天堂	桑折直君
全	在京都	高橋半也君
全	三重縣河藝郡河曲村	片岡正君
全	伊勢國三重郡海藏村東阿倉川	高崎二郎君
全	神戸市兵庫西出町大國病院內	松尾等君
全	大坂府立難波病院內	須藤庄太郎君
全	福井縣坂井郡三國町沙見	高松岩吉君
全	大坂市西區土佐堀三丁目六七、	笹田順二君
全	步兵第五十聯隊第二大隊	藤浪謙君
全	石川縣江沼郡大聖寺町郡立江沼病院	中村德藏君
全	阿波麻植郡川田	江崎恒人君
全	越後國三島郡出雲崎町	高橋常作君
全	步兵第七聯隊補充大隊第一中隊	鈴木實君
全	福井縣福井市寶永上町	榊原久君
全	福井縣足羽郡上文珠村	千葉玄也君
全	步兵第七聯隊補充大隊第一中隊一年志願兵	杉本恒治君
全	步兵第七聯隊補充大隊第一中隊一年志願兵	千田常外君
全	越前國三國町	山崎芳太郎君
全	橫須賀海軍機關學校	土田久三郎君
全	在清國	河合忠次君
全	對州竹敷要港部	大西瀨治君

全	韓國北韓會寧病院	林京次郎君	全	第四軍司令部	太田長作君
全	清國本溪湖守備隊	松山俊夫君	全	栃木縣足尾銅山	田代保二君
全	東京近衛步兵第一聯隊第二中隊一年志願兵	坂本信一君	全	在東京	森田齊次君
全	出征第九師團第一野戰病院	近郷重孝君	全	佐世保市富田病院	村尾純昌君
全	第九師團第二衛生豫備員	尾倉一英君	全	旭川豫備病院	前田豐作君
全	大連第一關東陸軍病院第二區	中村惠君	全	新潟市竹山病院	高島一二三君
全	沖繩縣那霸區字西	種子田秀吉君	全	大坂市東區今橋四丁目七	藤井榮四郎君
全	出征野戰砲兵第九聯隊	野嶽利七君	全	能登七尾府中町郡立七尾病院	渡邊疆君
全	神戸市下山手通六丁目一二七、	淺利義治君	全	石川縣河北郡森本村	井原悟君
全	大坂市東區備後町五丁目四、	彦阪誠一君	全	富山縣高岡市通町	河村宗作君
全	在紐育市	松原三郎君	全	東京醫科大學皮膚科教室	齊藤義雄君
全	大坂市北區安治川通南二丁	政山龍雄君	全	廣島市西白鳥町一四六、	吉田幡誠君
全	富山縣西礪波郡若林村	喜多外太郎君	全	福井縣今立郡上池田村谷口	手塚泰君
全	新潟縣中魚沼郡芦ヶ崎	大口富治君	全	新發田衛戍病院	小野謙三君
全	出征第九師團第一野戰病院	野口詮太郎君	全	香川縣大川郡志度町	松田龜太郎君
全	第九師團第八補助輸卒隊	太田精一君	全	東京市牛込區原町一ノ二〇、	蓮村外男君
全	愛知縣立醫學專門學校	久保武君	全	在橫濱市	兒島亮吉君
全	清國小塔子兵站司令部	宮井勇君	全	加賀小松町字本大工町	太田他計作君
全	東京市本鄉區西片町十番地い士號	生沼曹六君	全	能登鹿島郡餘喜村	武田榮藏君
全	東京市下谷區上野廣小路町六、多田醫院	庄司正義君	全	歩兵第八聯隊第六中隊一年志願兵	貴島善兵衛君
全	新潟市竹山病院	安田三木君	全	東京市淺草區地方今戸町四、	辻岡律君
全	滿洲野戰砲兵第十七聯隊	森川修君	全	石川縣石川郡大野村字觀音堂	本田三郎君

(會告)

全 東京市神田區連雀町一八、
 全 縣立神戸病院
 全 日向國都城町
 全 富山縣東礪波郡東盤若村
 全 佐世保軍港碇泊驅逐艦夕霧

杉山政長君
 山田信之君
 平田一若君
 宮島健治君
 中島正泰君
 橘董君
 八木德太郎君
 都築熊藏君
 越田信吉君

○稟告

會計整理上參拾五年度以後校外特別會員
 會費未納ノ諸君ハ此際速カニ納付相成度
 候也

明治三十九年一月

十全會



人？

雨城

泣いて暮すも五十年
 笑ふて暮すも五十年

* * * * *

人の此の世に生れしは 何を成すとして生れしぞ
 樂しむ爲めに生れしか 苦しむ爲めに生れしか

富貴よ名譽よ人爵よ 現に似たる影れふて
 黄金の奴隸となる爲に 人は此の世に生れしか

食ふて稼いで寝て起きて さて死ぬ爲に生れしか
 戀に沈んで悶えては 狂ひ死のとして生れしか

善惡、邪正、曲直の 入り亂れたる塵の世を
 救ふ爲として生れしか なほ亂すとして生れしか

* * * * *

悲しんで暮すも五十年
 樂しんで暮すも五十年

廣 告

故河野通夫君在學紀念として有志諸賢より
義捐せられたる金四圓八拾五錢を以て左の
書籍を購求し十全會雜誌部へ寄贈致し候間
此段謹告仕候也

明治三十九年一月十五日

發 起 人

寄贈書籍

一近世診斷學

全一冊

一顯微鏡及化學的検査法

全一冊

故河野通夫君在學紀念書籍費

決算報告

○收入之部

一金四圓八拾五錢也

寄附金總額

内 譯

一金拾錢宛

佐々木 靜君

原 秀君

吉田繁次郎君

佐 口 榮君

高木 琢麿君

臼井丈吉君

田 中 基保君

宇 野 正君

南 茂吉君

水 口 順君

原田悅次郎君

林田信平君

山田外來雄君

島田義一君

野村義若君

山田茂樹君

加藤鐵作君

黑田道純君

若林古福君

平澤謙齋君

鷹見義郎君

今村文碩君

不破才三郎君

伴 鐸也君

渡邊關重君

山川宮三君

濱田眞組君

塚崎 茂君

山林鏑二君

桑原益方君

深澤治三郎君

中村欣一郎君

岡 忍君

深瀬陸郎君

春日 望君

中島正一君

古屋榮治君

池谷運平君

長村吉太君

高野宗重君

井上松三郎君

林 可一君

藤井一雄君

乾 一夫君

松本重太郎君

小黑仁太郎君

某 君

一金五錢宛

小野醇吉君

武波峰吉君

太田勘市君

小野醇吉君

武波峰吉君

○支出之部

一金參圓參拾錢

近世診斷學

一冊代

一金壹圓五拾五錢

顯微鏡及化學的検査法

一冊代

一金四圓八拾五錢

右之通り決算報告仕候也

發 起 人

ドクトル富士川游校訂 帝國圖書館司書 太田爲三郎編

日本醫事雜誌索引

明治卅二年度分新刊

正價 金七十錢
郵税 四錢

既刊

- 明治三十三年度分
- 明治三十五年度分
- 明治三十七年度分

正價 金六拾錢
郵税 金四錢
正價 金七拾錢
郵税 金四錢
正價 金八拾錢
郵税 金四錢

- 明治三十四年度分
- 明治三十六年度分
- 明治三十二年度分

正價 金七拾錢
郵税 金四錢
正價 金八拾五錢
郵税 金六錢
新刊

右手に方書を購ひ左手に藥價を握らんとする而已の人には、此書無用ならんも、苟も日新醫學と共に馳騁して、斯道の研鑽に熱心なる士は、一日も座右に缺くべからざるの寶典なり、サレバ、此書の書架上にあると否とよ由りて、其人の品格を卜するの標準となすを得べき乎、特に聞く處によれば、明治四十二年より於て、萬國醫學會を我國に開設せんとするの議ありと、此時に當り、我醫學を世界各國に紹介するには、「リテラツール」を漏すことなく蒐輯するは最も肝要たるを信ずる也、此書、於是乎、益々其必要を認むるに至らん、即此書は各冊數年間日本醫事雜誌に掲載せられたる原著は勿論重なる翻譯ものは悉く載せて漏らすと無し若し某の件に就て「リテラツール」を搜索せんと欲する時は座右の索引を取て引き試みれば之に關する記載は何々の雜誌の何々の號に在ると一目の下に瞭然たるべし、苟も學者たる者は必ず一本を備へざるべからず

發賣所

東京市本郷區龍岡町卅四番地
(電話下谷一六七二番)

吐鳳堂書店

金澤醫學
專門學校

十全會會則摘要

(明治三十八年
五月改正ス)

- 一本會ハ本校職員、卒業生、學生及本校ニ緣放アル者ヨリ成リ職員及卒業生ヲ特別會員トシ學生ヲ通常會員トシ本校ニ緣放アル者ヲ贊助會員トス
- 本校職員卒業生及學生ハ總テ本會會員タルノ義務アルモノトス
- 一本會ニ講話部、雜誌部、學術實習部、遊技部、劍道部、柔道部及弓術部ノ七部ヲ置ク
- 一本會一切ノ經費ハ特別會員及通常會員ノ負擔トス
- 本校職員タル特別會員(校内特別會員)ハ會費トシテ相當ノ金額ヲ寄附スベキモノトス
- 本校卒業生タル特別會員(校外特別會員)ハ會費トシテ一ケ年金壹圓ヲ納ムベシ但シ一時ニ金參圓ヲ納ムル者ハ五ケ年ヲ一期トシ該期間本會發行ノ雜誌ヲ配布ス
- 將來卒業ノ特別會員ハ最終授業料納付ノ節必ス一時ニ三ケ年間ノ會費金參圓ヲ納ムベシ
- 通常會員ハ會費トシテ一ケ年金壹圓五拾錢ヲ納ムベシ
- 特別會員ニシテ引續キ三ケ年間會費未納者ハ除名ノ上一般會員ニ通告ス
- 一本會ノ會計年度ハ毎年九月ニ始リ翌年八月ニ終ル
- 一講話部ニ於テハ毎年一回以上講師ヲ聘シテ道義上ノ講話ヲ聽聞シ又隔月一回醫學及藥學ニ關スル講議會ヲ開ク
- 一講話部ニ於テハ特ニ語學會ヲ開クコトアリ
- 一雜誌部ニ於テハ毎年五回醫學及藥學ニ關スル會員ノ演說談話並ニ本校ノ現況、會員ノ動靜等ヲ記載シタル雜誌ヲ發行シテ會員ニ頒ツ
- 一雜誌部ニ於テハ本會所屬ノ圖書ヲ管理ス
- 一學術實習部ニ於テハ専ラ小野慈善院ノ患者ニ就キ診療治療ヲナシ學生ヲシテ臨床實習及調劑實習ヲナサシム
- (運動部規定ニ關スル規定摘要ハ畧ス)

▲投稿心得七則▼

- 一投稿用紙は中折紙を用ゐ必ず楷書たるべし殊に洋字は字體を明かに記入せらるべし
- 一端書洋紙等に認めたるもの又は字體亂雜なるものは總て沒書トす
- 一誌上匿名を望まるゝも原稿には必ず住所姓名を記入せらるべし
- 一言の政治に涉り或は德義に背くものは一切登載せず
- 一未完の原稿は採録せず
- 一原稿採否の權は編輯長にあり
- 一旦寄送せられたる原稿は返戻の需めあるも之に應せず

十全會雜誌部

明治三十九年二月廿八日印刷

明治三十九年三月三日發行

編輯兼發行者

石川縣金澤市廣坂通新道二十六番地
森 島 彦 夫

印刷者

石川縣金澤市尾張町八十二番地
宇 野 孝 太 郎

印刷所

同 所
活 文 堂

發行所

金澤醫學專門學校十全會

電話【六十五番】